

おぶち しち のおはなし

岩屋山のふもとには、二川の町を見守るように、小淵しちの銅像がひっそりと建てられています。

しちは、1847年に群馬県の前橋市で生まれ、小さいころから家の手伝いに明けくれ、母親の横で糸引き座ぐりきの使い方をおぼえました。もともと手先がきょうで物おぼえのよかったしちは、つとめた製糸場で、ぬきんでた技と知識を身につけました。そして16さいになった時、そこをやめ、自分で製糸業を始めました。17さいで結婚しましたが、夫が酒とかけごとに明け暮れていたため、中島伊勢松（のちの徳次郎）とともに、前橋をとび出し、豊橋の二川町にやってきました。製糸業を始めようと考えていた二川の人たちは、2人を大かんげいし、製糸を教えてくださいようをお願いをしました。豊橋にのこると決めたしちは、32さいの時に、小さな製糸工場を二川の地につくりました。



〈小淵志ちの銅像〉

しかし、しちの技術や工場の発展をねたんでいた人たちは、せっかくしちが育てた女工さんを引き抜いたり、原料を安く仕入れさせないようにたくらんだりしました。やがて、しちの工場は、他の工場よりもおくれをとるようになりました。

しちはくじけませんでした。同業者のさまざまないやがらせがつづく中、しちは、玉まゆの活用を思いつきました。玉まゆは、一つのまゆの中にさなぎが二匹入っているため、使いものにならない「くずまゆ」として知られていました。そのため、かなり安く仕入れることができたのです。悪せん苦とうのすえ、しちはついに玉まゆから糸をとることに成功しました。安くて品質のよい玉まゆのおり物は、日本各地だけでなく、海外にも輸出されました。そうして1897年（明治30年）、現在の二川地区市民館があった場所に、しきち面積200つぼもの大きな工場「糸徳製糸場」を建てました。



豊橋の町は、「絹都」とよばれ、生糸がさかんな町として発展をとげました。しちは、従業員千人をかかえる大工場主ながらも、女工さんと同じように寝起きし、同じものを食べたそうです。学校に行かなかったのも、読み書きは苦手でしたが、糸をつくることに一生をささげたしちは、83さいでなくなりました。

〈製糸工場のようす〉